

非認知能力としての自尊感情の諸側面 (1)

— 他人を見下す仮想的有能感とペットとの死別経験の関連 —

臨床心理学科 箕 浦 有希久

抄 録

The low sense of assumed-competence based on undervaluing others is one of the aspects of self-esteem as a noncognitive skill. We predicted that past pet breeding experience and bereavement experience with pets may suppress the sense of assumed-competence, and at the same time, increase self-esteem in people. Responses were collected from a web survey conducted on 441 people. A comparison of the four competence types, which consisted of high and low assumed-competence and self-esteem scores, showed that only the “omnipotent type” had a high frequency of experience in breeding dogs, and only the “self-respective type” had a high frequency of bereavement with pets when they were under 16 years old. We opined that dog and human attachment may promote high self-evaluation, and sharing of experiences and feelings with family and friends about bereavement of pets may promote self-esteem as a non-cognitive skill.

Key Words : noncognitive skill, self-esteem, assumed-competence, bereavement experience with pet

問題と目的

非認知能力とは

非認知能力 (noncognitive skills) は、それまでの教育測定学が研鑽し続けてきた“標準化された学力テスト”という方法では測ることができない能力であるとされる。また、高IQ (intelligence quotient, 知能指数) であるにもかかわらず人生で成功を取めることができなかった人もいれば、反対に低IQでも多くの成功を成し遂げた人もいることを説明する概念が非認知能力であるとも言われている (Heckman & Rubinstein, 2001)。これまで多くの心理学者が、動機づけ・粘り強さ・対人的な信頼性・忍耐力・自制心・自尊感情 (self-

esteem)・楽観主義といった様々な非認知能力の測定方法の開発を試みてきたとも指摘されている。そのため、非認知能力は学力テストや知能検査では測ることができないとされているが、質問紙調査や面接・観察といった心理学的調査法によって測定不可能とみなされているわけではないようである。

非認知能力は通常の心理学的構成概念とは異なり、明確な定義や単一の具体的内容は想定されていない。「非認知」という言葉に表されているように、「～ではない」という否定表現を用いて対象とする構成概念を指し示そうとする特殊な特徴もある (小塩, 2021)。非認知能力という新しいアイデアについて Heckman & Rubinstein (2001) は論文の中でそれを“宇宙

物理学における暗黒物質 (dark matter)”にたとえている。広辞苑第六版によると、暗黒物質とは銀河内や銀河間に大量に存在しながら、光を発していないのでその正体がまだわからないと考えられている仮説上の物質である。人類にとって把握しやすい光や電波によっては観測できていないものの、天体に重力による影響を及ぼしていることから存在するものとみなされている。

つまり、現在までの教育測定学的な確固たる方法では十分に捉えられていないが、実践家や学校教員、親などの子どもたちに関わる人々の多くが必要で重要だと感じている様々な内容をすべてひっくるめて“非認知能力”と呼んでいると言って差し支えない。したがって“非認知能力”に含まれる内容は時代や文化によっても変化し一定ではないだろう。非認知能力は大変に都合のよい概念であることは間違いないが、しかし、宇宙物理学における暗黒物質の研究がまったくのナンセンスではないのと同じように、非認知能力という概念を取り上げて研究を行うこともまた一定の意味を持つと考えられる。

非認知能力としての自尊感情

近刊の心理学辞典のひとつでは、自尊感情 (self-esteem) は、自分自身に対する評価とそれに伴う“感情”およびそれを組み込んだ“自己意識” (大野, 2021) と定義されている。その内容は、人に対して優越性を示すというより、今の自分をよいものとしてそのまま受け入れるものとされる。自尊感情は自分自身を全体として肯定的に評価することであり、人間が心理的に十分に機能するための基盤を支えるものとして、これまで多くの関心を集めてきた。自尊感情はさまざまなポジティブな心理的特徴と相関があるため、幅広い精神的健康の指標として用いられることも多い。自尊感情が高いと、

ストレスが低く情緒的に安定し、困難に直面してもあきらめず積極的に対処しようとする傾向がある。達成への強い動機づけをもち、人に対する緊張が低く周囲の人々から好意的に評価されやすい特徴をもつ (遠藤, 2018)。

箕浦 (2021) は非認知能力としての自尊感情を3側面 (多次元性による緩衝作用、変動性による回復力、本来性による均衡化) から捉える視点を紹介した。この視点はウィリアム・ジェームズによる自尊感情の公式 (自尊感情 = 成功/願望) に立脚しており、自尊感情の高さだけではなく多様な側面から見た安定性も重要視している。高いが不安定な自尊感情は、自尊感情の脅威となる他者への攻撃性や怒り・敵意といった感情を導くこともある (Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989)。低くて不安定な自尊感情の持ち主は自らが他者から拒絶される兆候に敏感過ぎるために、親密な他者との繋がりを過剰に再確認しようと試み、最終的に本当に友人や恋人から疎まれてしまいやすい (Zeigler-Hill & Wallace, 2012)。したがって、自尊感情の脅威に直面して適切に対処できる力こそが非認知能力としての自尊感情の重要な側面だと言えるのである。

他者軽視に基づく仮想的有能感

自尊感情研究の歴史の中で、高い自己評価は必ずしも良い結果をもたらすだけでなく、時に悪い結果をももたらすことが数多く指摘されてきた。心理学者のトウエンギとキャンベルは『自己愛過剰社会 (原題: The Narcissism Epidemic)』という著作の中で、自尊感情と自己表現を重んじて「自分を好きになること」を追い求めすぎるあまり、大勢のナルシシストを生み出してしまったアメリカ文化の社会問題を指摘している。序文を見ると“人々は「自分ブランド」をつくろうと躍起になり、自分自身を

売り物のようにきれいに包装する。金融機関の広告は、引退後は子供にかえて夢を追えと人々を誘う。高校生はクラスメイトを殴り、ユーチューブに暴行ビデオを投稿して注目を集めようとする (Twenge & Campbell, 2009 桃井訳 2011, p.7)”とあり、出版から十年以上経過する現在の日本の社会状況をまるで予見したかのような内容であることに驚かされる。

高い自己評価と関連した問題行動の多くは、自尊感情と部分的に関係するところがある自己愛 (narcissism) が原因であると考えられる。速水・木野・高木 (2004) は教育心理学者の視点から現代青年の有能感 (competence) のあり方について考察し、それを3種類に分類する視点を提案した。第一には、成功経験や他者からの評価を通して妥当に高まった自己評価によって成立する「通常の有能感」が挙げられる。従来から有能感やコンピテンスという名称で、適応的な行動や学業成績を予測する心理的構成概念として多くの研究がなされてきた。第二には、現実にはそれほど成功経験も他者からの評価も得てはいないが自己評価の基準が甘いことで容易に高まる「自己愛的な有能感」が挙げられている。幼時的万能感を青年期まで残

してしまっている状態とも言い換えられるかもしれない。そして第三が、自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚であり、「仮想的有能感」と名付けられている (測定項目はTable 1参照)。

自尊感情は成功や達成といったポジティブ経験の累積に付随して高まっていくものであるが、反対に仮想的有能感は自己の直接的なポジティブ経験があろうとなかろうと根拠なく持たれている有能感である。そのため先行研究では自尊感情と仮想的有能感の間に一貫して無相関あるいはごく弱い負の相関が確認されている (速水, 2012)。自尊感情と仮想的有能感を心理尺度によって測定した場合にそれぞれの平均値を基準として高低群に分け、さらにその組み合わせから4つの有能感タイプに分類することができる (Fig. 1参照)。

最も注目すべきは、自尊感情が低く仮想的有能感が高い「仮想型」であり、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」という仮想的有能感の特徴をもっともよく捉えたタイプであると言え

Table 1 仮想的有能感尺度第二版 (ACS-2) の項目 (速水, 2006)

項目
1. 自分の周りには気のきかない人が多い
2. 他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる
3. 話し合いの場で無意味な発言をする人が多い
4. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い
5. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
6. 自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない
7. 他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い
8. 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる
9. 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない
10. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない
11. 世の中には、常識のない人が多すぎる

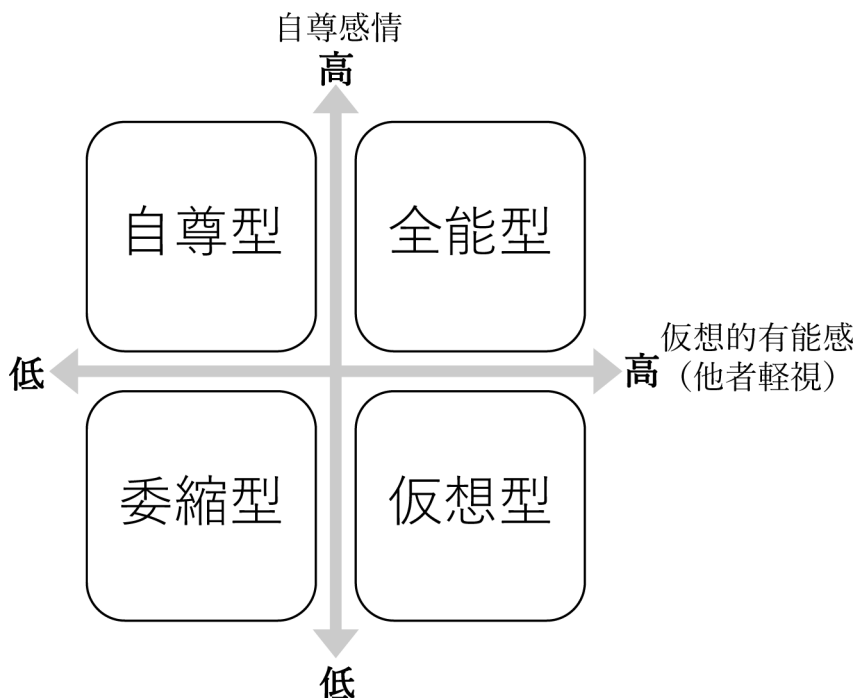


Fig. 1 自尊感情と仮想的有能感で分かれる有能感タイプの4種類

る。「全能型」は自尊感情と仮想的有能感がともに平均以上に高い人である。全能型の中には、自己の直接的なポジティブ経験を根拠として他者を見下す仮想的有能感が強まっている人もいだろうし、反対に非常に高い仮想的有能感が自尊感情も高めているといった前述の自己愛的有能感の高さに特徴づけられた人も含まれている可能性がある。「自尊型」はもっとも社会的に望ましい特徴をもった人物であり、自分に自信を持っているからこそ他者軽視をしないタイプである。最後に、自尊感情と仮想的有能感がともに平均以下の低い人が「委縮型」であり、自信がなく目立たない人たちである(速水, 2012)。

自尊感情を育てるいのちの教育

どのようにすれば自尊感情を高めたり、あるいは仮想的有能感を低めたりすることができる

だろうか。それも表面上の質問紙回答や心理尺度得点を一時的に吊り上げたり、社会的に望ましいような見せかけだけの振る舞いではなく、人が内発的に自らを価値ある大切な存在だと思い、同時に他者を尊重して感謝や慈しみを自然と感ずることができるようになるためには、何が必要なのだろうか。

近藤(2010)は、他者と自己の間の「共有体験」が他者との比較とは関係しない基本的自尊感情を育むと主張している。共有体験の内容は、道具の共有・時間の共有・場所の共有・知識の共有・感情の共有・意志の共有といった、単純なものから心に深く影響するものまで幅広く想定されている。たとえば、幼少期の親子における感情の共有体験として「死んだ金魚の埋葬」が取り上げられている。幼い子どもはまだ金魚が死んだということを十分に理解できず、ただただ不明瞭な寂しさや物足りなさを感じて

いることだろう。親は子とともに庭の片隅で金魚の埋葬の作業を進め、金魚の墓に向かって手を合わせて祈りやお別れの言葉を口にする。子は親の行為を模倣することを通して、いま心に浮かぶ感情の正体が「死別の悲しみ」であることへの理解を少しずつ深めていく。

生き物をただ飼育するだけではなく、その存在に愛着を持ち、ともに喜んだりともに悲しんだりしなければ共有体験をしているとは言えない。怖ろしいことに現代の住宅事情の中では、死んだ金魚をトイレに流したり生ゴミとして捨てるだけの家庭も珍しくはないとのことである(近藤, 2009)。「いのちの教育」という言葉からは、動物や人間の生と死、誕生や死別に関するアクティビティばかりを連想しがちだが、そうではなく、体験を共有し、感情を共有することが「いのちの教育」の根幹である。ペットの飼育経験から生き続けることの大変さを実感し、死別経験によって失われた命の取り返しのつかなさ恐怖することができる。親や友人とその体験を共有し、感情を共有することで、自分自身のいのちの大切さを思い知ることで、自己の自尊感情は高まり、他者軽視や仮想的有能感抑制されると考えられる。

本研究の目的

多様な領域で長い間「どうすれば自尊感情を高めることができるか」という問いに答えようとする研究や実践が繰り返されてきた。しかし近年、単に自尊感情を高めるだけでは個人の適応や精神的健康に望ましい結果はもたらされないことが指摘されている。真に適応的な自尊感情の在り方、すなわち非認知能力としての自尊感情の側面として、他人を見下す仮想的有能感の低さという特徴が挙げられる。本研究では特にいのちの教育の考えに基づいて、過去のペット飼育経験ならびにペットとの死別経験が現在の仮想的有能感を抑制し、同時に自尊感情

を高める可能性があると予測し、Web調査による検討を行った。

方法

調査時期および手続き

インターネット調査会社(株式会社アスマーク)を利用して、2021年11月から12月にかけてWeb調査を実施した。調査参加者に一度に与える負担が過大にならないようにするため、調査内容を計4回に分けて調査を実施した。各調査間の間隔は5日間であった。

全調査がWebによって行われる質問形式の調査であったため、各調査の実施に際して、調査の目的・期間と場所・参加をお願いする理由・倫理的配慮等に関する説明文を提示した。その文章中には、本調査への参加は自由であり参加しないことで不利益が生じることがないこと、参加を決めた後でも回答が終了する前であれば、いつでも中断、参加を取りやめることができること、参加に伴って予想されるリスクや利益、調査実施者が調査参加者個人を特定できる情報を収集することはないこと、データはすべて統計的に処理され、個人が特定されることはないことの説明が含まれていた。

本研究は、佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会の承認を得て実施した(2021-12-B「自尊感情の発達と適応的機能に関する横断的調査」)。

調査参加者

インターネット調査会社に登録した20歳以上の成人のみから構成されるモニタに対して、年代・性別・婚姻の有無について均等に割り付けた回答依頼を投げかけた。目標回収人数を上回ったことが確認できた時点で回答依頼を打ち切る方式とした。そのため登録モニタ数が多く回答反応も活発で早いと考えられる30歳台のデータがやや多く回収され、反対に20歳台や70

歳以上の年齢層からのデータ回収数はやや少ない結果となった (Table 2参照)。

データ回収数は第一調査で1626名, 第二調査で1117名, 第三調査で612名, 第四調査で451名であった。誤って重複回答されたデータを除外し, 最終的に第一調査から第四調査すべてに脱落なく参加していた調査参加者441名を有効分析対象者とした。有効分析対象者の性別および年齢層ごとの人数をTable 2に示した。

調査内容

自尊感情 Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。評定は, あてはまらない (1点), ややあてはまらない (2点), どちらともいえない (3点), ややあてはまる (4点), あてはまる (5点) の5件法とした。質問項目は「少なくとも人並みには, 価値のある人間である」「自分には, 自慢できるところがあまりない」などの計10項目からなる。全10項目の得点を単純加算したものを自尊感情得点とした。得点が高いほど, 全般的な自尊感情が高いことを意味する。

仮想的有能感 仮想的有能感は“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく, 他者の能力を批判的に評価, 軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚 (速水, 2006)”と定義される。他者を見下すことによって得られる有能さの感覚は, 自身の成功・達成経験に基づいて形成される自尊感情とは似て非なるものだといえる。本研究では, 速水 (2006) の仮想的有能感尺度第二版を用いた。評定は, 全く思わない (1点) から, 頻繁に思う (7点) までの7件法とした。全ての項目の得点を単純加算したものを仮想的有能感尺度得点とした。得点が高いほど他者を見下すことによって得られる有能さの感覚が高いことを意味する。

ペットの飼育経験 過去と現在を含めたペットの飼育経験についてペットの個体別に最大5

頭まで回答するように求めた。5頭以上飼育していた場合には回答者にとって特に印象に残っている5頭について回答を求めた。回答の選択肢として示した生き物の種類は, 一般的にペットとしてなじみ深いと思われる「犬」「猫」「鳥類」「魚類」「昆虫類」「カメ」「うさぎ」とし, さらに「その他」と「飼育経験なし」にあたる選択肢も用意した。さらに飼育を開始した年齢と終了した年齢, 終了した理由, その生き物の飼育にどの程度貢献していたかを自由記述で回答を求めた。飼育を終了した年齢と終了した理由に関する自由記述の内容に基づき, ペットとの死別経験の有無および幼少期 (16歳未満) におけるペットとの死別経験の有無を判断した。

その他にも同居家族, 恋人や配偶者の有無, 主観的幸福感, 所属欲求, 両親の生き物の飼育経験, 子育て観, 結婚観に関連する変数を測定していたが本研究では分析対象としなかった。

統計ソフト

データ分析にはMicrosoft社ExcelとVBAで動作するフリーの統計分析ソフトHAD17 (清水, 2016) を使用した。

結果

データの基礎統計量

各尺度の内的整合性を確認するためCronbachのアルファ係数ならびにMcDonaldのオメガ係数を算出したところ, 自尊感情尺度 (10項目) は $\alpha = .894$, $\omega = .910$ であり, 仮想的有能感尺度 (11項目) は $\alpha = .871$, $\omega = .872$ であった。いずれも十分に高い内的整合性が確認された。回答者の全体および年代別の尺度得点の基礎統計量を算出しTable 2に示した。Hayamizu, Kino, Takagi (2007) の年齢層別の仮想的有能感得点と本研究の結果を比較した層別ヒストグラムをFig. 2に示した。5件法で測定していた先行研究に合わせて本研究の得点を

Table 2 Mean of assumed-competence scale and self-esteem scale scores by age group

age group	n		自尊心 Self-esteem		仮想的有能感 Assumed-competence	
	male	female	<i>m</i>	<i>SD</i>	<i>m</i>	<i>SD</i>
			<i>m</i>	<i>SD</i>	<i>m</i>	<i>SD</i>
From 20 to 29 years old	16	26	29.88	(7.48)	46.17	(9.23)
From 30 to 39 years old	76	51	29.30	(7.99)	45.31	(10.24)
From 40 to 49 years old	43	35	28.77	(7.37)	45.24	(11.21)
From 50 to 59 years old	42	30	30.75	(8.04)	43.64	(10.55)
From 60 to 69 years old	46	45	32.85	(7.08)	45.54	(9.46)
Over 70 years old	15	16	37.87	(5.52)	42.06	(8.78)
Total	238	203	30.83	(7.85)	44.93	(10.13)

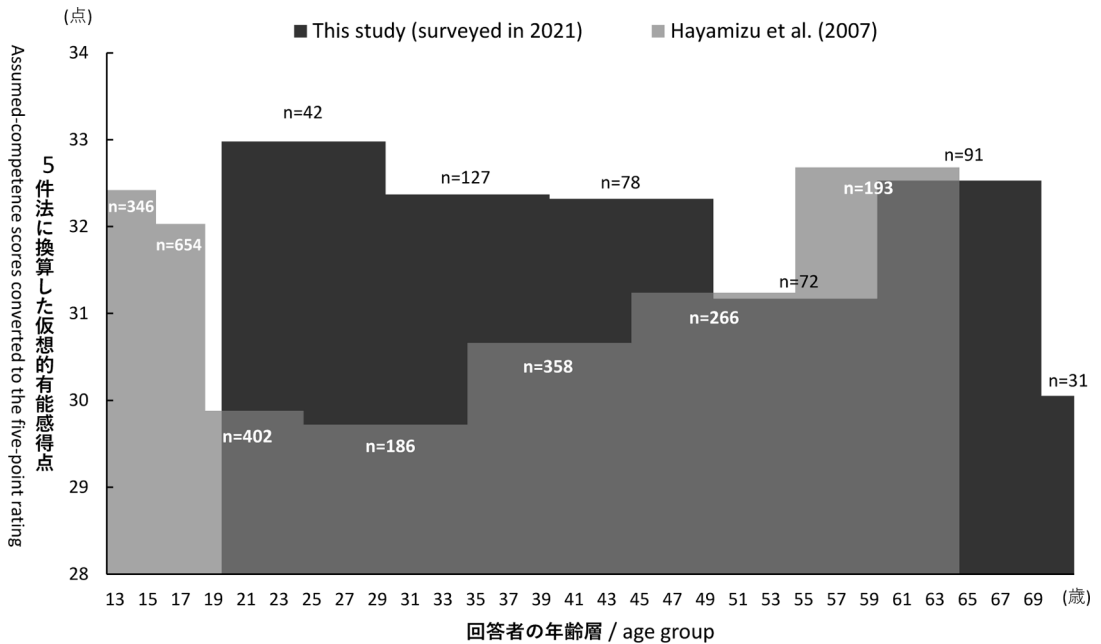


Fig. 2 Comparison of assumed-competence scores by age group in two sample.

換算している。過去と現在を含めたペットの飼育経験数のヒストグラムをFig. 3に示した。過去と現在を含めて一度もペット飼育経験の無い人は、総数441名中140名(31.75%)であった。

尺度得点の相関分析と有能感タイプ別の基礎統計量

自尊心得点と仮想的有能感得点に有意な相関係数はみられなかった ($r = -.03, ns$)。これは過去の多数の研究でも同様の結果が繰り返

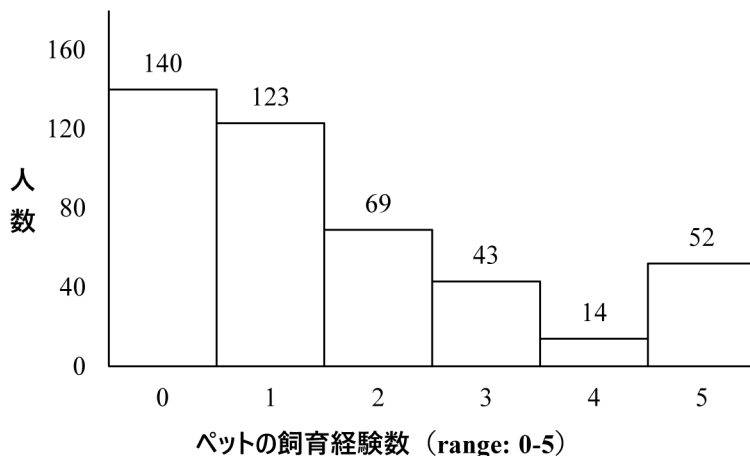


Fig. 3 Histogram of the number of pet breeding experience including past and present (n=441).

し確認されており、非常に頑健な現象である(速水, 2012)。先行研究の分析方法にならい、自尊感情得点 (m = 30.83, SD = 7.85) と仮想的有能感得点 (m = 44.93, SD = 10.13) それぞれの平均値を基準として高低群に分け、すべての調査対象者を4群に分割した(群ごとの基礎統計量はTable 3を参照)。

ペットの飼育経験と有能感タイプの分析

有能感タイプの4群を独立変数として、ペットの飼育経験数(範囲は0から5)を従属変数とした一元配置分散分析を実施した(Fig. 4参照)。従属変数の分布が正規分布的でなかったため、F比の分母を調整するノンパラメトリッ

ク検定のWelch ANOVAを用いた。その結果、群の主効果は有意であり ($F=3.09, df=3/240.84, p<.05$), Holm法による多重比較を行ったところ全能型と自尊型よりも委縮型が有意傾向で印象に残っている動物の飼育経験数が少なかった(全能型-委縮型: $t=2.40, df=437, p<.02$; 自尊型-委縮型: $t=2.61, df=437, p<.01$)。

有能感タイプの4群とイヌの飼育経験の有無に基づく4×2のクロス集計表をTable 4に示した。 χ^2 検定の結果、度数に有意な偏りがみられた ($\chi^2=13.21, df=3, p<.01$)。その後の検定の多重比較として残差分析を行うにあたっては、検定の多重性を考慮してBonferroniの修

Table 3 Basic statistics by 4 competence type

	全能型		仮想型		自尊型		委縮型	
	Omnipotent		Assumed		Self-respective		Atrophy	
	n							
	101		115		120		105	
	<i>m</i>	<i>SD</i>	<i>m</i>	<i>SD</i>	<i>m</i>	<i>SD</i>	<i>m</i>	<i>SD</i>
自尊感情 Self-esteem	24.39	(5.70)	36.37	(4.44)	25.30	(5.21)	37.25	(5.09)
仮想的有能感 Assumed-competence	37.87	(5.94)	37.23	(7.06)	51.83	(6.40)	53.55	(7.43)

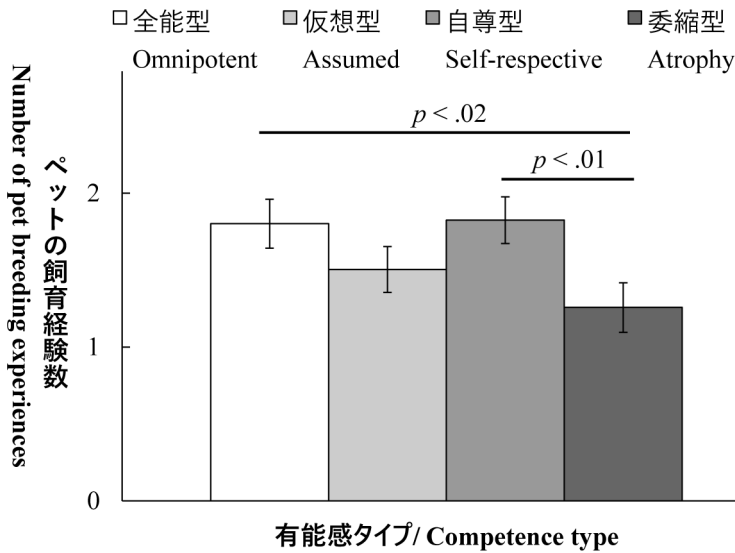


Fig. 4 Number of pet breeding experiences by 4 competence type

Table 4 Cross tabulation by 4 competence type and breeding experience of dogs

		有能感タイプ / Competence type				合計 Total
		全能型 Omnipotent	仮想型 Assumed	自尊型 Self-respective	委縮型 Atrophy	
イヌの飼育経験 Breeding of dogs	有 Experienced	52 51.5%	37 32.2%	50 41.7%	31 29.5%	170 38.6%
	無 No experience	49 48.5%	78 67.8%	70 58.3%	74 70.5%	271 61.5%
合計 Total		101 100.0%	115 100.0%	120 100.0%	105 100.0%	441 100.0%

注) 列ごとの度数の比率をパーセンテージで示した。残差分析の結果が1%水準で有意であったセルの数値を太字で示した。

正法に基づき1回の検定につき有意水準1%で判断することとした。その結果、全能型のみイヌの飼育経験の有る人の度数が有意に多かった ($p < .01$)。飼育経験の有無について他のペットの種類別(ネコ・鳥・魚・昆虫・カメ・ウサギ)にすべて同様の分析を行ったが、いずれの場合も χ^2 検定が有意でないか、あるいは残差分析で有意な度数の偏りが見られなかった。

ペットとの死別経験と有能感タイプの分析

有能感タイプの4群とペットとの死別経験の

有無に基づく 4×2 のクロス集計表を Table 5 に示した。 χ^2 検定の結果は有意であった ($\chi^2 = 12.31, df = 3, p < .01$)。多重比較として残差分析を行うにあたって、検定の多重性を考慮して Bonferroni の修正法に基づき1回の検定につき有意水準1%で判断することとした。その結果、全能型はペットとの死別経験の有る人の度数が有意傾向で多く ($p < .02$)、仮想型はペットとの死別経験の無い人の度数が有意傾向で多かった ($p < .03$)。

有能感タイプの4群と幼少期(16歳未満)の

Table 5 Cross tabulation by 4 competence type and bereavement experience of pets

		有能感タイプ / Competence type				
		全能型	仮想型	自尊型	委縮型	合計
		Omnipotent	Assumed	Self-respective	Atrophy	Total
ペットとの	有	58	43	62	41	204
死別経験	Experienced	57.4%	37.4%	51.7%	39.0%	46.3%
Bereavement	無	43	72	58	64	237
of pets	No experience	42.6%	62.6%	48.3%	61.0%	53.7%
合計		101	115	120	105	441
Total		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注) 列ごとの度数の比率をパーセンテージで示した。残差分析の結果が5%水準で有意傾向であったセルの数値を太字で示した。

ペットとの死別経験の有無に基づく4×2のクロス集計表をTable 6に示した。χ²検定の結果は有意傾向であった(χ² = 7.38, df = 3, p < .07)。多重比較として残差分析を行うにあたって、検定の多重性を考慮してBonferroniの修正法に基づき1回の検定につき有意水準1%で判断することとした。その結果、自尊型のみ幼少期(16歳未満)のペットとの死別経験の有る人の度数が有意傾向で多かった(p < .04)。

考察

仮想的有能感の基礎統計量について

自尊感情と仮想的有能感の基礎統計量に注目してみると、本研究より10年以上前に実施された先行研究の調査(Hayamizu et al., 2007)と比べて本調査の結果の方が自尊感情尺度得点は

やや低く、仮想的有能感尺度得点はやや高い傾向がみられた(Fig. 2)。この原因はサンプルの特徴に由来すると考えられる。先行研究のHayamizu et al. (2007)は大学生と学校教師・幼稚園児の両親・市役所職員向けの市民講座参加者を対象とした質問紙調査票を用いた調査であった。本研究のサンプルはインターネット調査会社に登録しているモニタであり、必然的にインターネット利用行動の頻度が高いサンプルであるだろうと考えられる。大学生のインターネット依存傾向と仮想的有能感の関連を検討した青山・高橋(2016)は、自尊感情が高く仮想的有能感が低い「自尊型」のみ、没入的関与・依存的関与といった問題の多いインターネット行動の頻度が有意に低かったと報告している。これはインターネット調査会社に登録している

Table 6 Cross tabulation by 4 competence type and bereavement experience of pets before youth

		有能感タイプ / Competence type				
		全能型	仮想型	自尊型	委縮型	合計
		Omnipotent	Assumed	Self-respective	Atrophy	Total
幼少期のペット	有	28	22	38	20	108
との死別経験	Experienced	27.7%	19.1%	31.7%	19.0%	24.5%
Bereavement of	無	73	93	82	85	333
pets before youth	No experience	72.3%	80.9%	68.3%	81.0%	75.5%
合計		101	115	120	105	441
Total		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注) 列ごとの度数の比率をパーセンテージで示した。残差分析の結果が5%水準で有意傾向であったセルの数値を太字で示した。

モニタからなる本研究のサンプルの基礎統計量において自尊感情尺度得点はやや低く、仮想的有能感尺度得点はやや高い傾向がみられたことと矛盾しない。別の可能性として時代・コホートの効果も考えられるが、その点について検討するためにはサンプル抽出等の調査手続きを統制した上での得点の比較が必要である。

ペットの種類別の結果とイヌとヒトの愛着関係について

ペットの飼育経験の数と有能感タイプの分析の結果、「委縮型」は「全能型」・「自尊型」よりも回答した動物の飼育経験数（最大5頭まで）が少ない特徴が見られた。「仮想型」とは有意な差が見られていない。「全能型」・「自尊型」はともに自尊感情の高いタイプである。ペットの種類を区別せずに単純な飼育経験の多さだけを見ても、ペットを飼育する経験は自尊感情の高さと関連があると推測される（Table 4）。さらにペットの種類ごとに詳細に検討してみたところ、ほとんどのペットの種類で飼育経験の有無と有能感タイプに統計的に有意な連関は確認されなかったが、唯一イヌにおいて飼育経験の有る人の度数が「全能型」で有意に多かった。

イヌは他の種類のペットと比べてどのような点で特別だと言えるのであろうか。今野(2019)はイヌとヒトが「最良の友」とであると言える二つの理由として、「感情を介した共依存的な関係を築く点」と「双方向的な交流を通じて協力しあう点」を挙げている。そしてそのような稀有な共生関係を支えている基盤は互いの「眼」を介した視覚情報のやりとりであると主張している。すなわちイヌの原種はヒトと同様に虹彩色が明るかったため、視線によるコミュニケーションが成立しやすく、他の動物種との間では不可能な情緒的な愛着形成が成立したとする説である（Fig. 5参照）。イヌとヒトは視線を通じたコミュニケーションによって情緒

的な愛着関係を築きやすく、そのような経験は親・家族・友人との間で築かれる幼少期の重要な愛着関係の構築を補強したり代替したりする役割があるのかもしれない。愛着の問題が自尊感情の低さと関係することを示す先行研究もみられる（北村, 2008; Roberts, Gotlib, & Kassel, 1996）。残念ながら本研究では調査対象者の愛着スタイルや過去の養育経験などについては把握することができていない。今後の展望として、さまざまなペットの中でもイヌの飼育には、幼少期の愛着形成を補佐するような特別な効果が存在する可能性がある点を指摘しておきたい。

ペットとの死別経験は他者を見下す仮想的有能感を抑制するか

有能感タイプの4群とペットとの死別経験の有無には有意な連関があり、「全能型」はペットとの死別経験の有る人が多く、「仮想型」はペットとの死別経験の無い人が多かった（Table 5）。自尊感情が低く仮想的有能感のみが高い「仮想型」において唯一“ペットとの死別経験の無い人が多い”という結果が得られたと言える。他者を見下しており自身の自尊感情も低い仮想型の人々には、人生の中で小さな命との取り返しのつかない別れというものを経験することなく成長してきてしまったという背景があるのかもしれない。ただし仮想型と同じく仮想的有能感の高い「全能型」においては“ペットとの死別経験の有る人が多い”という反対の結果が得られている。単純にペットとの死別経験があれば他者を見下さなかつたり自尊感情が高まったりすると考えるのはあまりにも早計であるだろう。

そこでペットとの死別経験の有無を幼少期に限定して分析してみたところ、異なる結果が得られた。有能感タイプの4群と16歳未満の時期におけるペットとの死別経験の有無には有意傾



Fig. 5 チンパンジー（右上）は虹彩色が暗いため視線の向きを判断しづらいがジャーマン・シェパード（左）の眼は虹彩色が明るいいため視線の向きを読み取りやすい。ヒト（右下）の場合は大きく露出した強膜（いわゆる白目部分）と対比して虹彩の動きが明白である（画像はWikimedia Commonsより取得したパブリックドメイン）。

向の連関があり、「自尊型」のみペットとの死別経験の有る人の度数が多かったのである (Table 6)。主に思春期や児童期と呼ばれる人生の一時期において小さな命と取り返しのつかない別れを経験したことが、自尊感情を高く持ち、だからと言って他人を見下すこともない、もっとも適応的な有能感タイプへの成長を促進している可能性が示唆されたと言える。本研究の限界として、ペットとの死別時に親や友人と体験や感情を共有することができたか否かについては把握できていない。しかし一般的に、16歳以上よりも16歳未満の思春期や児童期におけるペットとの死別経験の方が、同居家族や学校場面にて他者とともに死別を体験し、感情を共有する機会を得ることが出来た可能性が高いと推測できるだろう。

本研究の限界と今後の展望

本研究で収集したデータはあくまで過去のペットとの死別経験と現在の自尊感情と仮想的有能感の関係を検討したものであり、因果関係についてはさらなる研究の積み重ねが必要不可欠である。また、すべて現在から過去を振り返って回答されたデータであるため、記憶のバイアスが影響していることは否めない。飼育への貢献度については自由記述による回答を収集してはいたものの、記述内容から貢献の程度を数量的に取り出すことは困難であり統計的に分析することができなかった。今後はペットを通じた共有体験に基づく非認知能力としての自尊感情の変化について、介入による検討や縦断的データによる検証が望まれる。

本研究の結果で幼少期のペットとの死別経験は高い自尊感情と低い仮想的有能感をもつタイプと関連していたが、それは幼少期の生活環境

の方が家族や友人とともに死別を体験し、感情を共有する機会を得た可能性がおそらく偶然に高くなるだろうと推測できるからである。したがって、幼少期を過ぎてしまうとペットとの死別経験から良い影響を受けることが不可能になると考えているわけではない。ペットはただ飼育さえすれば人に良い影響を与えるというものではなく、ペットと情緒的な愛着関係を築くことや、ペットやペットを媒介した他者と体験や感情を共有すること（たとえば、死別の悲しみなど）が大切であるだろうと考えている。

最後に今後の展望として、近年興隆しているアニマルセラピー関連領域への貢献が挙げられる。アニマルセラピーの効果を「生理的効果」「心理的効果」「社会的効果」の3側面から捉える視点をはじめとして、治療メカニズムを解明しようとする基礎研究が増えている（八城, 2020）。本研究のイヌに関する結果からは視線によるコミュニケーションの特別な重要性が示唆された。また、ペットとただ触れ合うだけでなく、同じ目的に向かって協働体験をすることや、ペットを通じて人間の他者と感情の共有体験をすることが心理的にポジティブな効果をもたらすと予測できる。さらには、情緒的な愛着関係さえ確保することができたならば、たとえセラピストの代替的存在が人形やロボット、ヴァーチャルリアリティによる存在等であっても高いセラピー効果を期待できるかもしれない。本研究では、いのちの教育の考えに基づいてペットの飼育経験や死別経験が自尊感情を高めて仮想的有能感を抑制する効果（すなわち、非認知能力としての自尊感情）について検討した。このような視点は個人の心理的well-beingの促進だけにとどまらず、将来のアニマルセラピーやロボットセラピーといった代替存在による介入療法の治療効果メカニズムを考えていく上でも役に立つ面があるだろう。

【引用文献】

- 青山郁子・高橋舞 (2016). 大学生におけるインターネット依存傾向、攻撃性、仮想的有能感の関連. *日本教育工学会論文誌*, 39(Suppl.), 113-116.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- 遠藤由美 (2018). 第15章 自己. 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 (著) 心理学 (新版) (pp.375-396) 有斐閣
- 速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち. 講談社
- 速水敏彦 (2012). 仮想的有能感の心理学—他人を見下す若者を検証する— 北大路書房
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討. *名古屋大学教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学)*, 51, 1-8.
- Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. (2007). Effects of age and competence type on the emotions: Focusing on sadness and anger. *Japanese Psychological Research*, 49, 211-221.
- Heckman, J. J. & Rubinstein, Y. (2001). The importance of noncognitive skills: Lessons from the GED testing program. *The American Economic Review*, 91, 145-149
- James, W. (1892). *Psychology: The briefer course*. New York: Harper. (ジェームズ, W. (著)・今田寛 (訳) (1992). 心理学 (上) 岩波文庫)
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*,

- 56, 1013-1022.
- 北村琴美 (2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連— 心理学研究, 79, 116-124.
- 近藤卓 (2009). 死んだ金魚をトイレに流すな—「いのちの体験」の共有— 集英社新書
- 近藤卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践— 金子書房
- 今野晃嗣 (2019). 第5章 イヌとヒトをつなぐ眼 大石高典・近藤祉秋・池田光穂 (編著) 犬から見た人類史 勉誠出版 (pp.108-130)
- 箕浦有希久 (2021). 11章 自尊感情—自分自身を価値ある存在だと思ふ心 小塩真司 (編著) 非認知能力 概念・測定と教育の可能性 (pp.181-192.) 北大路書房
- 小塩真司 (2021). 序章 非認知能力とは 小塩真司 (編著) 非認知能力 概念・測定と教育の可能性 (pp.1-10.) 北大路書房
- 大野久 (2021). 自尊感情 子安増生・丹野義彦・箱田裕司 (監) 有斐閣 現代心理学辞典 (p. 312.) 有斐閣
- Roberts, J. E., Gotlib, I. H., & Kassel, J. D. (1996). Adult attachment security and symptoms of depression: The mediating roles of dysfunctional attitudes and low self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 310-320
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2009). *The Narcissism Epidemic*. New York: Simon & Schuster. (トウエンギ, J. M.・キャンベル, W. K. 桃井緑美子 (訳) (2011). 自己愛過剰社会 河出書房新社)
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 八城薫 (2020). 職場におけるイヌ (セラピー犬) 介在の社会的・心理的効果の検証 人間生活文化研究 (*International Journal of Human Culture Studies*: 大妻女子大学人間生活文化研究所紀要), 30, 349-352.
- Zeigler-Hill, V. & Wallace, M. T. (2012). Self-esteem instability and psychological adjustment, *Self and Identity*, 11, 317-342.

[Acknowledgement]

本研究はJSPS科研費20K14144「乳幼児期から成人期までの自尊感情の発達と機能を探る」(若手研究2020-2023年度, 代表: 箕浦 有希久)の助成を受けたものです。

本研究は佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会の承認を得た研究計画(承認番号2021-12-B、研究代表者: 箕浦 有希久)の一部です。

本研究の実施にあたり, 竹内紀乃華さん(佛教大学教育学部臨床心理学科2021年度卒業)に調査準備の補助のご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

(みのうら ゆきひさ 臨床心理学科)